

國學院大學学術情報リポジトリ

「人間開発」理念に基づく教育課程の再構築

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 大誠, 夏秋, 英房, 杉田, 洋, 太田, 直之, 神長, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001409

〔令和二年度 國學院大學人間開発学会第十二回大会 シンポジウム〕

「人間開発」理念に基づく教育課程の再構築

趣旨説明

司会 藤田大誠（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

報告一 学部コア科目「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」の展望

夏秋英房（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

報告二 学部コア科目「教職論」の展望

杉田 洋（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

報告三 学部コア科目「日本の伝統文化」の展望

太田直之（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

コメント

神長美津子（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

討議

〔日時〕令和二年十一月七日（土）十三時～十七時

〔開催方法〕【Zoomミーティングによるオンライン会議】

主催：國學院大學人間開発学会・國學院大學人間開発学部

趣旨説明―本シンポジウムの前提とその目的―

國學院大學人間開発学部健康体育学科 教授 藤田 大誠

【令和二年度の人間開発学部FD推進事業】

國學院大學人間開発学部令和元年度FD推進事業「原点としての学部設置理念「人間開発」の徹底的再検討に基づくFD共通基盤の構築」では、國學院大學の建学の精神「神道精神」と学部設置理念「人間開発」、初等教育・健康体育・子ども支援各学科の教育目的との相互関係を確認しつつ学部全体と各学科との間で往還的議論を積み重ね、学部設置理念「人間開発」の再検討を行った。その議論では、本学の建学の精神「神道精神」や学問基盤「国学」が学部理念の前提として確認された一方、それらと「人間開発学」との関係や学部理念に基づき各学科が養成する人間像のブラッシュアップの必要性、具体的には学部理念の教育課程における反映、特に学部名称を冠した必修科目「人間開発基礎論」の在り方が課題として浮かび上がった。

そこで令和二年度FD（ファカルティ・ディベロップメント、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称）推進助成（甲）学部FD推進事業「学部理念に基づく教育課程の再構築に向けて―「人間開発基礎論」の抜本的検討

を中心に―」では、初年次教育科目や学部コア科目をはじめとする学部必修科目全体の在り方を視野に入れ、主に学部コア科目「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」に関する抜本的検討を学部全体で行うことで、学部理念に基づく教育課程の再構築に向けた「組織的な職能開発」を試みることを目的とした。

本事業内容の主な目的は、学部理念名称を冠した一年前期必修科目「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」（学部コア科目、オムニバス授業）の抜本的検討であった。今年度は新型コロナウイルス感染症蔓延のため、大学全体のスケジュールが大幅に変動した関係上、実質的な事業開始が当初計画よりも後にずれ込んだものの、八、九月において学部全体で集中的な取り組みを行った結果、概ね予定していた通りの検討作業を推進することができた。具体的には、同科目の令和二年度担当者三名から現状の内容を確認した上で、本学部全専任教員にアンケートを取って同科目の現状と今後の在り方に対する意見を記述してもらい、それらをもとに各学科連絡会で議論を積み重ね、学部全体にフィードバックして同科目を検証し、学部教授会で令和三年度「人間開発基礎論」の運営方針を決定した。

また、この成果を踏まえ、学部コア科目全体（「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」、「教職論」、「日本の伝統文化」）の現状と課題を把握し、学部理念に基づく教育課程（特に学部必修科目）の再構築に向けた論点整理、展望を行った。

【令和二年度の学部FD推進事業における議論の軌跡】

1、第一回人間開発学部FD協議会

〔開催日〕令和二年八月五日（水）

〔開催方法〕Zoom ミーティングによるオンライン会議（人間開発学部専任教員四十四名が参加）

(1) 人間開発学部FD推進委員長挨拶

成田信子（人間開発学部学部長、本事業申請者）

(2) 令和二年度人間開発学部FD推進事業の説明

藤田大誠（人間開発学部健康体育学科教授、実務担当者）

(3) 令和二年度「人間開発基礎論」担当者による現状報告

〔報告一〕柴田保之（人間開発学部初等教育学科教授）

〔報告二〕一正孝（人間開発学部健康体育学科教授）

〔報告三〕夏秋英房（人間開発学部子ども支援学科教授）

(4) 質疑応答 司会 藤田大誠

・学部コア科目「人間開発基礎論」の沿革を確認した後、同科目の令和二年度担当教員三名の現状報告と質疑応答があり、本学部全体で問題を共有した。その上で本学部教員に対して「学部コア科目「人間開発基礎論」に関するアンケート」への協力を依頼した（提出期限は八月十九日（水））。

《検討の前提とした関連資料》

①『國學院大學人間開発学部 令和元年度「FD推進助成（甲）学部FD推進事業」 原点としての学部設置理念「人間開発」の徹底的再検討に基づくFD共通基盤の構築 報告書』（冊子として配布済み。改めてPDFファイルとして提供する）

※「令和元年度國學院大學人間開発学会第十一回大会シンポジウム報告「人間開発」の再検討―その原点と将来を見据えて―」（「國學院大學人間開発学研究」第一一〇号、令和二年に収録。報告書にも同内容収録）

②「令和元年度人間開発学部FD推進事業報告 配布資料」

③「人間開発基礎論」シラバス

平成二十一～二十四年度シラバス

・「人間開発基礎論Ⅰ（人間力育成の人間学）」

・「人間開発基礎論Ⅱ（ヒトのしくみとはたらき）」

平成二十五～二十九年度シラバス

・「人間開発基礎論Ⅰ（人間力育成の人間学）」（三名の担当者によるオムニバス授業）

・「人間開発基礎論Ⅱ（ヒトのしくみとはたらき）」

平成三十～令和二年度シラバス

・「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」（三名の担当者によるオムニバス授業）

④第一回人間開発学部FD協議会における「人間開発基礎論」現任担当者三名によるレジュメと提供資料

・柴田保之「人間開発基礎論をめぐって」

・一正孝「学部FD「人間開発基礎論」の再検討」

・夏秋英房「人間開発基礎論（夏秋担当）の考え方」

2、第一回拡大学部FD推進委員会

〔開催日〕 令和二年八月二十一日（金）

〔開催方法〕 Zoom ミーティングによるオンライン会議（人間開発学部執行部会＋FD推進委員十名が参加）

- ・アンケート結果をもとに令和三年度「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」の運営方針案を検討した。

3、初等教育学科・健康体育学科・子ども支援学科の臨時連絡会

〔開催日〕 令和二年八月二十六日（水）

〔開催方法〕 Zoom ミーティングによるオンライン会議（それぞれの学科連絡会において、初等教育学科十五名、健康体育学科十五名、子ども支援学科十一名の専任教員が参加）

- ・第一回拡大学部FD推進委員会の見解とアンケート結果をもとに学科としての具体案を決定した。

4、第二回拡大学部FD推進委員会

〔開催日〕 令和二年九月十一日（金）

〔開催方法〕 Zoom ミーティングによるオンライン会議、本学部執行部会＋FD推進委員九名が参加）

- ・各学科臨時連絡会で決定した案を踏まえ、令和三年度「人間開発基礎論」の運営方針を確定した。

5、令和二年度第五回人間開発学部教授会

〔開催日〕 令和二年九月三十日（水）

〔開催方法〕 Zoom ミーティングによるオンライン会議（専

任教員四十三名ほか参加）

- ・学部FD推進委員より報告された「学部コア科目「人間開発基礎論」運営方針について」により学部全体で確認。

《学部コア科目「人間開発基礎論」運営方針》

- ①同一授業時間帯（前期月曜2限）の三コマ開講、各学科単位でクラス編成とする。

- ②初等教育学科・健康体育・子ども支援各学科からそれぞれコーディネーター一名即ち計三名の担当者を選定する。

※令和三年度コーディネーター

- ・初等教育学科（柴田保之）

- ・健康体育学科（藤田大誠）

- ・子ども支援学科（夏秋英房）

- ③第一、二回は学部全体（三学科合同）で行う。

- ④第一回授業では、「人間開発」の基盤及び出発点である本学の建学の精神「神道精神」と設置趣旨に基づく「人間開発」理念を確認する。担当者は、「導入基礎演習」冒頭部分の移行として考えるため、主に学部長・副学部長が担当することが想定される（校歌練習なども含む可能性はある）。

- ※人間開発学部必修の初年次教育科目「導入基礎演習」第一回の内容を移行。

- ⑤第二回授業は、多くの課題を孕みながらも十二年間実施されてきた「人間開発基礎論」の蓄積内容を踏まえた「総論」的内容であり、なおかつ各学科から選定されたコーディネーター三名による相互検討に基づく内容とする。

- ⑥第三～十四回は三分割し、各学科の責任で四回分の内容を構

成する（それを各学科の三クラスにおいて行う）。各学問分野の特性や学生の理解し易さも考慮する。

⑦各学科担当分（四回分）は、単独ではなく必ず複数（二名以上）の教員で行う。

※令和三年度の担当予定者

・初等教育学科 柴田保之（二回）、柴崎和夫（二回）の二名による講義×三コマ

・健康体育学科 健康体育学科専任教員十六名＋人間開発学部教育実践総合センター客員教授一名が参加して行うシンポジウム形式の授業（四回）×三コマ

・子ども支援学科 夏秋英房（二回）、石川清明（一回）、野本茂夫（一回）の三名による講義×三コマ

⑧第十五回授業は、本授業の総括的内容（まとめ）とする。第十四回までの授業を踏まえた上で各学生が自身にとっての「人間開発」を考え、教員と学生間或いは学生相互が諸意見を共有することによって、学士課程四年間の学問形成やそれ以後も含めたキャリア形成の出発点と位置付ける。

6、第二回人間開発学部FD協議会

〔開催日〕令和二年十月二十一日（水）

〔開催方法〕Zoom ミーティングによるオンライン会議（人間開発学部専任教員四十一名が参加）

(1)人間開発学部FD推進委員長挨拶

成田信子（人間開発学部学部長、本事業申請者）

(2)趣旨説明

藤田大誠（人間開発学部健康体育学科教授、実務担当者）

(3)学部コア科目「教職論」「日本の伝統文化」の現状

〔報告一〕「学部コア科目「教職論」の現状」

杉田洋（人間開発学部初等教育学科教授）

〔報告二〕「学部コア科目「日本の伝統文化」の現状」

太田直之（人間開発学部健康体育学科教授）

(4)質疑応答 司会 藤田大誠

・令和三年度「人間開発基礎論」の運営方針確定を踏まえ、学部コア科目全体（人間開発基礎論（人間力育成の人間学）、「教職論」、「日本の伝統文化」）の現状を把握するため、「教職論」と「日本の伝統文化」の現任担当者による報告の後、質疑応答を通して学部理念に基づく教育課程（特に学部必修科目）の再構築に向けた論点整理を行った。

7、初等教育学科・健康体育学科・子ども支援学科の臨時連絡会

〔開催日〕令和二年十月二十八日（水）

〔開催方法〕Zoom ミーティングによるオンライン会議（それぞれの学科連絡会において、初等教育学科十七名、健康体育学科十五名、子ども支援学科十二名の専任教員が参加）
・学部理念「人間開発」に基づく教育課程（特に学部必修科目）の再構築に向けた各学科における論点整理を行った。

【本シンポジウムの目的】

以上の議論を踏まえ、本シンポジウムは、学部コア科目全体を展望することによって、「人間開発」理念に基づく教育課程を再構築するための論点整理を行うことを目的とする。

〔報告一〕

学部コア科目「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」の展望

國學院大學人間開発学部子ども支援学科 教授 夏秋 英房

「人間開発学」は「教育学」と何が違うのか

発表させていただく機会をいただき、ありがとうございます。ただその分、本当に眠れない日々が続いていたというところが大げさですが、悩みも深くなりました。「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」において、「人間開発学」と「教育学」とは何が違うのだろうかということを考えなければならぬからです。

田中智志さんが作成した「教育学（教育諸科学）の分布図」（『教育学がわかる事典』日本実業出版社、二〇〇三年）でも示されているように、「教育学」自体、非常に多分野、学際的な領域

です。学問思考と教職思考、ミクロとマクロという大きな振れ幅を持っています。しかし、実はここには、生理学などは入っていないのです。ですから「人間開発学」

の場合は、さらに身体的な事柄、あるいは生理学的な事柄、そして

スポーツとか運動に関する事柄のようなものも加わってくるということになりますので、かなり多岐にわたります。

ただ、これらの事柄を積み上げてみたところで「人間開発学」が構想できるわけではないと思うのです。ですから、一体、何が軸なのか問われてくるのだらうと思います。

しかし先日、子ども支援学科専任教員の御意見を伺ったときに、やはり「人間開発」について、色々な御意見やイメージがあるようです。どうしたらいいものだろうかと考えました。

「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」という科目の根拠あるいはヒントとして、「学習環境を構成する原理」と「教育人間学」を挙げたいと思います。この科目の副題には「人間学」という三文字が入っているのですが、この「人間学とは何か」については、これまで全然触れてきませんでした。そこで、生かじりではありますが、少し考えてみたいと思います。

「学習環境」としての人間開発学部

まず、なぜ「学習」に注目をするのかについてお話しします。



「教育の前に人間開発あり」という新富康史先生（國學院大學人間開発学部創設時の学部長）の言葉がありました。そこで、「人間開発」を「学びの支援」と捉え、「教育の前に学びの支援あり」と考えてみると、学生あるいは先生方にもイメージがわきやすくなると思いました。

そう考えたのは、先日の子ども支援学科連絡会の中で、ある先生が「開発される側の学生の視点から、開発は自分の能力の開花であると教員が気づかせてあげること。これが、人間開発ではないか」と仰ったからです。なるほど、と思いました。つまり人間開発学部とは、学生が自分自身を「開発」することを学んでいく課程なのだと思ったので、では、そのような視点から、「学習をする環境」として捉えてみようと考えました。

教育課程という言葉には、狭義と広義の二種類の意味があります。狭義の教育課程は、いわゆる教育内容、それを教科や科目として構成したものと考えることができます。しかし、広義の教育課程は、学生が大学で体験する「経験の総体」のことを指します。今日は、「経験の総体」としての人間開発学部という視点をカリキュラムとして考えてみたいと思います。

「人間開発」を問うということは、「学習環境」としての人間開発学部をどのように構成するかを問うことになるのではないかと。つまり、「人間開発」を問うということは、「人間開発」を実践する本学部そのもののあり方を、再帰的に問うことになります。「人間開発」とは何だろうと考えることは、それがブルーメンランのように自分に返ってくる、そういった性質のものだろうと思います。そこで、人間開発学部を「学習環境」として捉えて、学びを保障するための改善を目指すといったことができ

るのではないかと思います。そして学生自身が、自分自身を開発していく、自分自身が学びを深めていく、広げていく、そういった環境を構成する当事者として、この「問い」を共有し、そして自覚的に学習環境づくりに参画する、ということができ

るのではないかと思います。

「学習」の本質とは

「学習」とは何かということについては、百家争鳴といいますが、非常にさまざまな意見があるうかと思えます。

教育学の観点から何をお示ししようかと思ったのですが、OECD教育研究革新センターが編んだ『学習の本質―研究の活用から実践へ―』（明石書店、二〇〇三年）という本が手掛かりになると思いました。

教育改革は各国で試みられているが、その限界として、学校現場まで浸透していない現状が見られる。一体、そのハードルを突破していくにはどうしたら良いのだろうか。生涯学習の基盤をつくり、知識基盤社会において必要とされるコンピテンシーをどう養えばいいのか。現代社会の中で教育の中心目標は、「学習した知識やスキルをさまざまな文脈や状況において柔軟かつ創造的に適用する力、すなわち『適合的能力』を習得することである」と捉えられるが、学校教育はこのような要請にこたえられるのか。学校教育の中核をなす学習モデルや環境が、知識基盤型の二十一世紀社会の鍵を握るスキルを学生たちに育てているのか。本書ではこのような「問い」を立てているわけです。そして、この「問い」に関わる教育学の研究成果をレビュー

して、それらを集約しながら、今の教育学の立場でどのような学習に関わる提言ができるか、捉え方ができるかということをもとめているのが、この本なんです。

「学習」は決して個人の内側で起きているものではありません。本質的に学習は「文脈化されている」ものと捉えます。「学習」の本質や成果は文脈に強く依存している。従って、組織に関する社会学的研究の知見を吸収し、教師の信念や仕事の状況に直接影響を与える必要があると捉えているわけです。つまり、「学習環境」そのものに注目して、「学習環境」をホーリスティックに、全体的に捉えるという視点が必要になってきます。

こういった視点を人間開発学部に適用的な場合に、どういったことが見えてくるのか、と考えました。

この本では、適応的なコンピテンスの習得に際して学生を導き支援する特徴と原理のうち、効果のある「学習」の四つの特性として、「学習は構成的である」、「学習は自己調整的である」、「学習は、状況的ないし文脈的である」、「学習は協同的である」を「学習」の本質として挙げています。

「学習環境」設定の核となる「原理」

また、本書では「学習環境」の設定の核となる七つの「原理」も挙げられています。

原理①

効果的な学習環境は、その中心的参加者としての学習者を認め、学習者の活動的な関わりを促進し、学習者としての自身の活動の理解をその内に育てていく。

ここで「関わり」(engagement)という言葉が鍵を握るわけです。実はこの「関わり」というものが複雑に結んでいくところに「学習」が成立するということ。それから、「知識はいつも学習者が活動することで構成される」という知識の構成論といった立場を取っているのが特徴です。

では、そこで教師はどういう立場を取るのかというと、一つは、形成的評価を行う。形成的なフィードバックを行って、評価を返していくことによって、学生の成長を助けていくということ。それから、教師は、学生が自分自身を調整できる自己調整的な学習者になるように、学生を励ます、支援するということが、教師の役割と捉えられております。

原理②

効果的な学習環境は、学習の社会的本質の基礎となり、うまく組織化された共同学習を積極的に促進する。

効果的な「学習」は、「単独」の活動ではなくて「分散型」、つまり共同的な学習であるという考え方をまとっていきます。ですから、人間開発学部でいえば、例えば、ルーム制とか、学生企画委員会とか、あるいは地域ヘルスプロモーションセンターの学生参画とかいったような色々な形で、学生が自ら学びを作っていく道筋があるというところに当たり、そこで非常に重要な学習の促進が行われるという考え方になります。

原理③

効果的な学習環境内にいる学習の専門家は、学習者の動機づけや達成感情の重要な役割を高度に調和させる（調整する）

「共同する力」という言葉もあって、これは測定できるよう

なものではないのですが、それは状況の中で、まさに培われていくものであり、非常に重要な力だろうと捉えています。「効果的な学習環境内にある学習の専門家」、つまり教師は、学習者の動機づけや達成感情の重要な役割を高度に調和させる、調整していく、そういうふうに、教師の役割を捉えています。

例えば、本学部では「教育インターンシップ」や各種実習などで外部に学生を送り出すわけですが、やはりそこで教師は、学生の動機づけや困難にぶつかっているところなどを色々見守りながら、その役割との調和をしっかりと図っていくとする、そういう役割を担うのではないかと。ですから、本学部における教育実践総合センターの役割というのは非常に大きいし、「教育インターンシップ」の担当者も非常に大きいということだと思います。もちろん各種実習については、私たちが学部全体の大きな課題だと思います。

原理④

効果的な学習環境は、学習者間の個人的な差異、既有知識を含む差異に非常に敏感である。

色んな個人間の差異に対応した、個別化された学習環境を設定していくべきである。これは一人ひとりばらばらにするという意味ではなくて、むしろ、色んな差異、違いといったものに応じて、指導していく。あるいは、見守っていく、支援していくことができるか、ということです。

原理⑤

効果的な学習環境は、ハードワークを要求するプログラムや過度な負担を取り除いて取り組めるプログラムなど、いろいろなプログラムを工夫する。

色んなプログラムを提供するが負荷を掛け過ぎない、そういうプログラムの提供の仕方の工夫が要するということです。

原理⑥

効果的な学習環境は、明確な期待を伴って作用し、そうした期待と一貫したアセスメント戦略を展開する。そこでは、学習を支える形成的なフィードバックが特に強調される。

どういうふうに評価をするか。先ほど言ったように、形成的評価の力というものを活用しながら、フィードバック戦略、アセスメント戦略を、きちっと考えていくのが必要だろう。それをすることによって学生は、評価によって縛られるのではなくて、自己調整的な学習者になることができると捉えています。

原理⑦

効果的な学習環境は、知識や教科の領域を超え、広い世界や地域にわたる「水平的なつながり」を強力に促進する。

「水平的なつながり」とは、学校内の話だけではなくて、学校外とのつながり。さまざまな地域、あるいは家庭といったものとのつながりの中で学生のことを理解する。また学生が、自分が学んでいることの意味を、社会の中でさまざまな経験的な学習を通して、意味を持った「学習」として理解して、また大学に帰ってくる。やはり、色んな経験から学ぶことの大きな意味は、ここにあると思います。「学ぶことの意味は何か」ということだと思います。

ですから、学校での「学習環境」と学生のインフォーマルな「学習」との間の交流を促すことが一番重要であって、そこに「往還的な学び」というものの意味が生まれてくるのではないかと考えます。

どういう「学びの支援」ができるのかという「問い」

以上、この『学習の本質』という本の内容を手掛かりにしながら、私たちの人間開発学部在り方というものを考えていく手掛かりができるのではないかと思います。

このような「学び」の視点を持つことによって、指導者としてどういう「学び」を組織していけるのか、どういう「学びの支援」ができるのか、といった「問い」を学生とも共有しながら「人間開発基礎論」を構成していく。その最初の一步をそれぞれの分野の先生方に考えていただくということができれば、もしかしたら、同じ方向を向いた「人間開発基礎論」が展開できるのではないかと考えた次第です。

このほか本書には、七つの原理にもとづく学習環境の構成として、（１）「教師中心ではなく学習者中心の環境を構成するが、教師の重要な役割を伴う」、（２）「構造化され専門的に設計された学習環境を伴う」、（３）「個別化した学習環境の実現。多様な学習ペースや必要に応じたフィードバックを通じて行われ、個々人の差異を考慮していく」、（４）「基本的に社会的かつ包摂的である」ということが書かれてあります。

つまり、「すべての原理は、学習環境の中に求められるべき」であって、「教育・指導のプロ」とは「学習環境のデザイナー」であるということ。それから、色んなつながりの中で、偶然性といったものの、偶然的な出逢いなども大きな要素としてあるのですが、ここで考えられているのは、「偶然的な学習でも非構造的な学習でもない」。これらを踏まえ、どのように指導をし

ていけば良いのかは、もう少し勉強してみないと分かりません。

「人間開発学」の基礎に「人間学」を置く

また、冒頭で少し述べましたが、「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」という科目の根拠あるいはヒントとして、「人間開発学」の基礎に「人間学」を置くということを考えましたので、「人間学」についても色々と調べてみました。

一九六〇年代に西ドイツ・オランダの人間学・実存哲学から生まれた「教育人間学」に関する著作などもあれこれひっくり返して見ているのですが、古くは一九六五年のO・F・ボルノウ『教育を支えるもの―教育関係の人間学的考察―』から始まって、M・J・ランゲフェルト『教育の人間学的考察』、そしてC・ヴルフ『教育人間学へのいざない』などの翻訳があります。その他、森昭、皇紀夫、田中毎実、鈴木晶子の各先生、教育哲学会や総合人間学会が編んだ先行業績があります。

ただ、教育哲学分野ですと、現代社会のメカニズムを扱っていないということ、宗教的な超越性の中に入りこんでしまいがちになるところがあって、なかなか「人間学」をそのままダイレクトに持ち込むのは難しいというのが、今の感触です。ただ、國學院大學は神道に根差している大学ですので、この超越性に関しては、もしかしたらクリアできるのかもしれないと思いますが、私にとっては埒外になります。

このようなことを考えているという中間的な御報告になってしまいました。以上です。

〔報告二〕

学部コア科目「教職論」の展望

「教職論」の位置づけをどう理解するか

「教職論」は、「人によって人になる」という教育の本質について、学生達に学校というリアリティーにできるだけ正面から向き合わせながら、過去との対比なども通して考え、よりよい教職人としての在り方を追求する学びです。そういう意味では、「人間開発」そのものと言えます。小学校教員の経験者である私の授業は、即時実践化には寄与できるという効果は期待できると思いますが、学問的追究の側面から見れば、夏秋英房先生

のような整理も、今後の展望もできているとはいえません。そのようなことを前提として、報告させていただきます。

まず、教員養成系の学部であることを考えれば、「教職論」の大学での学びについて、他の各科目と関連を図りながら進めていく必

要があると思っています。その点は、そのことについては、今一つ意識が弱かったと反省しています。

また、私自身、「人間としての開発」ということと、本学の建学の精神である「神道精神」との関係について整理できていません。先ずは、これをどのように三学科が共通に見定め、「日本の伝統文化」や「教職論」など、学部コア科目をどう位置づけていくかの役割分担を明確にしていく必要があるでしょう。

次に、「教職論」は、一般にどの大学でも行われており、その内容も似かよっています。また、取り上げなければならない内容もあるでしょう。そのような中で、そこに本学が目指す「人間としての開発」をどのように反映させ、学部コア科目としての役割を果たしていくかが課題です。

さらには、教職論については、入学してすぐの一年の前期に履修するという点では、初年次教育としての関連にも配慮する必要があると思っています。具体的には、三学科共通に行っているルーム制による「導入基礎演習」、さらには「専門基礎演習」、そして、「野外活動実習」（旧カリキュラムでは「総合講座（集団宿泊研修）」）との関わりを考慮しながら「教職論」の在り方



國學院大學人間開発学部初等教育学科 教授 杉田 洋

について考えるということです。このことについては、すでに各学科が異なった形で行っているという現状について、改めて整理し、今後どこに共通性を持たせるかの議論が必要なのかもしれません。このことは、初等教育学科だけでなく、健康体育学科の学生の両方の教職論を担当している現在の私の立場からは、特に重要なことだと思っています。

大学段階や「Society5.0」を見据えた「人間開発」を…

人間の成長過程を踏まえた上で、大学段階での「人間開発」をどう捉えるかという視点も大事です。多くの社会学者は、人間は生まれ落ちた家庭から、近所の遊び集団、小・中学校での学級等の集団、部活や地域での集団、高等学校などその後の多様な集団での体験の遍歴を通して人格を完成させるという考え方をもっています。価値観や性格などは、比較的根本的なことは幼少期に固まってしまう、後では変えにくいものとも言われています。そのような人間の骨格づくりがほぼできあがってきた状態にある大学生にとって、「人間の開発」をどう捉えたらよいのかということを考えてみる必要があるのだと思います。

さらに、仮に「人間開発」について、「神道精神」との関わりを強く意識した場合、「主体性を保持した日本人」とか「寛容性や謙虚さ」は、一見、時代を超えて不易のもののように捉えられます。一方で、学生がこれから出て行く社会は、刻々と変化していて、「開発すべき人間像」もその社会的変化に即して変わっていくものと捉えることもできます。

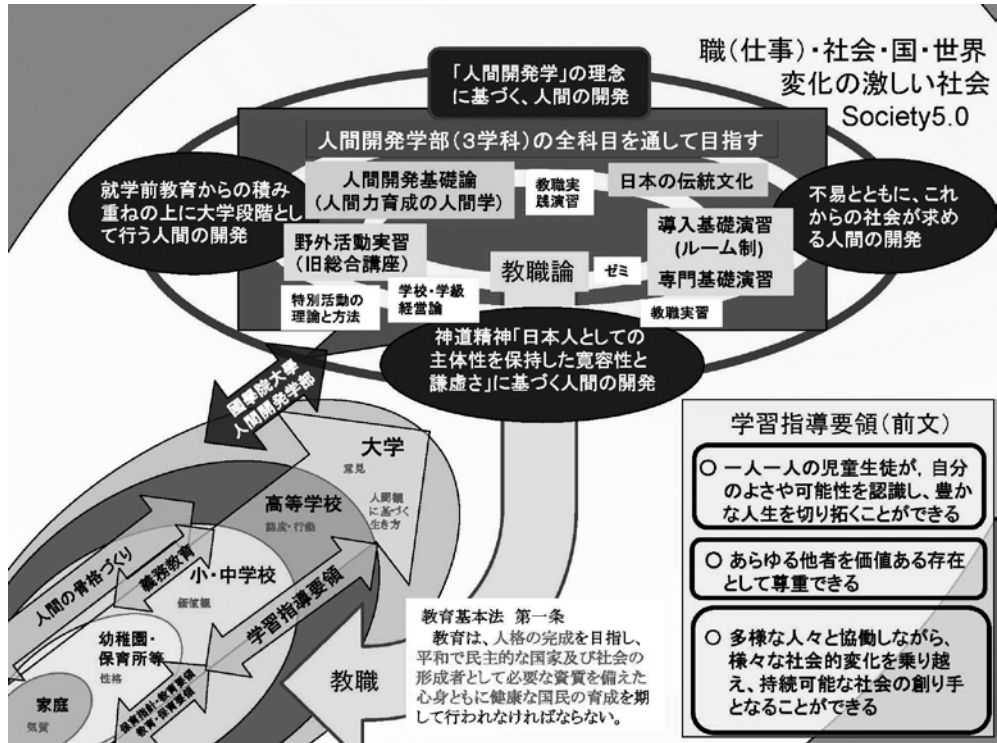
昨今では、「Society5.0」の時代に備えた人間づくりが求めら

れています。「Society1.0」は、狩猟社会を示しており、約六百万年も続いたと言われています。その後、「Society2.0」の時代を迎え、定住しての農耕社会が始まり、それが約一万年続いたと言われています。そして、おそらく、その頃からムラを作り、ずっと人間関係に悩み続け、未だに解決していないのだと思います。ムラは、やがて近隣のムラとの関係づくりを求められ。時に対立や統合などを繰り返し、やがては国を形づくり、その後、国と国との争いを繰り返してきた歴史があります。

そして、「Society3.0」の産業革命時代が始まったのは、わずか三百年前、等質の知識、技能の習得が必要とされ、「学校」という場が誕生し、知識、技能の習得型の教育が始まりました。そのような中、日本では、寺子屋や私塾などにおいて、世界最高に教育と人間形成までもが行われていたとされています。

そして、そのような時代を経てSNSでやりとりするような情報化社会としての「Society4.0」の時代が始まるのは、ほんの二十年前のことです。その際、記憶的で定型的で反復的なことはAI（人工知能）が行うのであり、それでも知識、技能習得型の学校で良いのかと問われるようになりました。物は豊かになり、社会は便利になり、プライバシーが大事にされ、政治、経済、文化も世界規模で影響し合う時代になり、世界の動向を常にみておかねばならなくなりました。

そして、今後三十年後には新たな社会「Society5.0」の時代を迎えるとし、その対応が学校教育に求められています。生活の仕方も働き方も変わる中で、「サイバー空間（仮想空間）」とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会を目



指そうとしているのです。

そのような中、文明発祥の地でもあるエジプトでも、「教科」を廃止し、すべて「総合学習」のようなプロジェクト型の学習へと改革をしています。宗教やアラビア語、算数などのように教えなければならないことを身に付ける時間は、プロジェクト学習の中にコア科目として位置付けられています。また、それと同時に、OECDなどにおいて、社会情動スキルとか人格形成をも、学校教育の役割とする考え方が世界に広がっています。エジプトは、その役割を日本式教育に求め、「Tokkatsu」を国家的なプロジェクトとして導入しています。「日本」と名の付く初めての海外の公立学校も四十三校設置されました。ある意味、イスラム教の国に、神道精神のようなものが受け入れられたと言ってもいいかもしれません。

このような人類の歴史を俯瞰してみると、六百万年の人類の歴史からみれば、「society3.0」の産業革命時代以降の変化は、わずか瞬きくらいの間しかありません。しかし、その短期間の中で、求められる人間像が急激に変わりつつあるのです。このような現実も見据えた上で、これからのSociety5.0の時代を見据え、「人間の開発」をどのように考えるのかという視点も大事なのだと思います。

ところで、「Society5.0」については、内閣府大臣官房政府広報室から様々に広報されています。次の動画は、その一つです。

「映像」内閣府政府広報オンライン「それは、いつもの毎日になってくる。半歩先の未来。」

(<https://www.facebook.com/gov.online/videos/>)

最後に「未来が楽しみでしょ」と投げかけています。テクノ

ロジの飛躍的な進歩によって、仕事の多くが機械化された近未来の描写は、便利さを感じる一方で、恐ろしさも感じます。次の動画は、アメリカにおける「仕事の未来」を映像化したものです。

〔映像〕 What School Could Be 「The Future of Work: Will Our Children Be Prepared?」

(<https://www.youtube.com/watch?v=59d3UZTFQ0>)

ところで、新型コロナウイルスによるロックダウンが初めて行われた武漢市の様子を「武漢日記」としてまとめた方方（ファンファン）さんは、社会の豊かさの指標について、「高いビルがいくつ建っているか、ICTがどこまで行き渡っているかではなく、弱者がどれだけ幸せに暮らせているかだ」という意味のことを述べています。果たして「人の間」と書く「人間」の本当の幸せとは何なのか、「働く」とはどういうことなのか、「学ぶ」とは何なのか。などと考えさせられます。そのようなことを考えていく先に、今後、開発すべき「人間の像」が見えてくるのかもしれない。

また、今般、改訂された『学習指導要領』には、初めて前文が示されています。その中で、これから求められる人間像として次の三つを示しています。

- 一人一人の児童、生徒が自分のよさや可能性を認識し、豊かな人生を切り拓くことができる。
 - あらゆる他者を価値ある存在として尊重できる。
 - 多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができる。
- これらは、今後開発すべき「人間像」の方向性を示している

ように思います。いずれにしても、人間の開発は、他者から一方的に与えられるものではなく、自己開発ということが大事なのでしょう。その点では、教員のみならず学生が参画する「國學院大學人間開発学会」の果たす役割やその意義について、さらに深く考えていく必要があります。

〔教職論〕における学生のリアクションカードの分析から

ところで、「教職論」の授業では、学生に毎回リアクションカードを書いてもらっています。その内容については、テキストマイニングをかけてみました。私の反省としては、そこに表された言葉だけを見ると、表面的なことが多く、その理念のようなことを深く考えさせていたのかという思いもあります。特に、「人間開発」という言葉が一つも出てきていません。まず、学部としての理念を統一し、各科目に即した形で、各先生方がこの言葉を意識して使っていくことから始める必要があるのかもしれない。

また、「全人教育」、「知・徳・体」、「森信三」、「時を守り」、「場を清め」、「礼を正す」などのキーワードは、必ずしも教職のみに関わるものではありません。健康体育学科の学生が「教職に就くつもりはないが、今後生きていく上で教職論は有意義な学びであった」という意味のことを書いてくれたことは、こちらの意図としていたところでもあり、嬉しかったです。

とは言え、初等教育学科は、やはり学級経営に関心を持ち、健康体育学科は、生徒指導に関心をもつということも見えてきました。そのことについて、単なる教育手法としてではなく、

教育理念としての違いについて議論し、教師としての在り方までを考えさせていく必要があったと思っています。「競争から共創へ」をどう捉えさせるのか、「みんな違ってみんないい」でも、「それではすまされないこともある」など、一見二項対立に見えるようなことについてもじっくりと考えさせていかなければならないのだと思っています。いずれにしても、「人間としての足らざるを知る」をどう実感できるようにするのが大事なのだと思います。教師である前に一人の人間としてどうあるべきか、というようなことを、しっかりと考えさせていく必要があるのだと思います。とりわけ学生が、自ら自問自答できるようにしていく学びのプロセスにしていくことが重要なのだと思います。

「許しと和解」と「神道精神」

日本の戦後の復興を支えてきた「協調性の高さ」などは、世界から高い評価を受けてきました。ただ、それは、新興国からのものです。ある意味そこには従順な国民を育てたいという思いがあるのかもしれない。一方、欧米諸国からは、これを「同調圧力」と捉える傾向もあります。実際、現代の日本の国は本当にそれで良いのかという思いもあります。今や何か問題があれば、インターネットで誹謗中傷を行い、攻撃し、自ら命を絶つまで追い込むような風潮が蔓延しています。それが学校にも、教室にも広がり、深刻ないじめ問題につながり、若者の自殺率が韓国に次いで世界二位になったことも懸念されます。

ところで、女性初の国連難民高等弁務官であった緒方貞子氏

は、世界平和には「許しと和解」が必要だと仰っています。「神道精神」（日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さの精神）は、この根本にあり、古いようだが今後の明るい未来をつくる重要なものになるのかもしれない。そして、このような対立の解決には「最適解」ではなく、「納得解」が必要なのです。孔子は、弟子から「人間として最も大事なことを一つだけ挙げるとしたら何か」と問われて、しばし考えて「恕」と答えたそうです。極々簡単に言うところ「すべてを許す」という意味です。信じ合うこと、期待し合うこと、許し合うことは、多様な人々の中で共に生きていく上での基本でもあります。

こんなことも考えながら、人間の開発ということも念頭におき、今後の「教職論」を改善してみたいと思いました。またありませんが、以上で報告とします。ありがとうございました。

第1回 教職論 授業「教職論を始めるに当たって」

① 心に残った私の先生と教職論への意気込み

初等教育学科

人間開発学

健康体育学科



〔報告三〕

学部コア科目「日本の伝統文化」の展望

國學院大學人間開発学部健康体育学科 教授 太田 直之

「日本の伝統文化」が必修科目である背景と意味

報告の三番目として、「日本の伝統文化」の展望についてお話しさせていただきたいと思います。同科目の現状の話もからめながら、展望を述べていきたいと考えております。

まず、そもそも「日本の伝統文化」が人間開発学部の必修科目として設置されていることの背景や意味についてです。

これについては、國學院大學の建学の精神との関わり、さらには本学にこの教育系学部を設置することの意味をどう位置づけるかというところから、この「日本の伝統文化」という非常に特徴的な科目が必修として設置されたと考えております。

「國學院大學学則」の第一条には「本学は神道精神によって人格を陶冶し」と記され、まずはこの「神道精神」というものがベース

に置かれています。また、本学では、建学の精神である「神道精神」について、平成十四年ぐらいから、「日本人としての主体性を保持した寛容性と謙虚さの精神」であるというふうにな身をかみくだいて説明するようになっていきます。そういう大学に教育系学部を創るにあたって、どういう特色のある教育を行っていくのか。建学の精神に基づいた伝統文化教育によって、この神道を中核とする日本の伝統文化の意義、これを学生に正しく理解させる。本学部の『設置の趣旨等を記載した書類』において、伝統文化教育を「人間開発」の方法の基盤に据えるというふうに謳ったわけです。

この伝統文化教育を「人間開発」の基盤に据えるということの本気で突きつめて考えていくと、なかなかこれはたいへんな問題ではあります。一つは、そもそも「学則」の中で「神道精神」というものがベースに置かれているのだということ。そこに人間開発学部というものを置くにあたって、その特徴として、こうした伝統文化教育、國學院らしい教育というものを図っていくというような意味合いでこの科目が置かれたのだというところになるかと思えます。



さらに、こうした科目が置かれることになったもう一つの大
きな背景としては、やはり平成十八年に行われた「教育基本法」
の改正があるということになるかと思えます。ここで改めて、
「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育」（前文）や「伝
統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛
するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与す
る態度を養う」（第二条第五号）ということが教育の目
標としてはっきり明文化されたということ。こうした流れを受
けて、さらに本学の伝統というものを踏まえた上で、この「日
本の伝統文化」という科目が必修として、整備されているのだ
ということになるかと思えます。

『学習指導要領』における「伝統文化」の位置づけ

そうした本学部の狙い、伝統文化教育の一つのベースに置く
という方向性、これが今、一体どういうふうに、この社会の流
れや教育全体の流れにマッチングしているのか。

これは先生方もよくご存じのことだと思えますので、私の方
からくどくど言うほどのことではないのですが、『学習指導要
領』における伝統文化の位置づけから確認したいと思えます。

平成二十年度と二十一年度の改訂、これは十八年の教育基本
法の改正を受けてのものになります。そこから十年後、先ほ
ど杉田洋先生の話にもありましたが、また改めて『学習指導要
領』の大幅な改訂がありました。ちょうど今年度から小学校に
おいて全面的にこれが導入されたということになります。

毎回改訂のたびに出される「改訂のポイント」という資料に

おいて、平成二十年度の改訂のときと同様、「伝統や文化に關
する教育の充実」が教育内容の主な改善事項の柱の一つとして
掲げられているところから、本学部における「日本の伝
統文化」の位置づけや意義は、そのまま継続して意味のあるも
のになっていると考えることができるわけです。

例えば『学習指導要領』の「改訂のポイント」を平成二十年
度と、平成三十年度を比べますと、変わった部分と変わらない
部分がそれぞれあります。

平成二十年度の「歴史教育（狩猟・採集の生活や国の形成、
近現代史の重視等）、宗教、文化遺産（国宝、世界遺産等）に
関する学習を充実」（社会科）といった文言は、平成三十年度
の改訂にはもう出てこなくなっています。ただこれは、平成
二十年度改訂で宗教や文化遺産に関する教育というのが、もう
教えるべき内容としてきちんと加わりましたので、今回の改訂
については特に明記されてはいないということになるかと思
います。今回における「改訂のポイント」の表記の仕方として
は、より具体的になっている所と科目との対応というのが、か
なり意識的に表示されるようになっていいると見受けられます。

それから、当然ここには表示されておりませんが、実際の教
育現場においては、「総合的な学習の時間」において、各科目
で取り扱う伝統文化に対する様々な教育や取り組みを串刺しに
するようなプログラム、カリキュラムが各学校の中で行われて
おります。これについては、東京都で行っているカリキュラム
開発の事業や教育政策研究所で行っている伝統文化教育の支援
事業などで多く見ることができるようになっています。

言うまでもなく、本学部においては、こういうことをきちん

と指導できる学生を育ていくということが、一つの大きな柱になっていると思われます。こうした伝統文化の位置づけが、『学習指導要領』で変わらずなされているのだということを踏まえた上で、現在、「日本の伝統文化」のカリキュラムが一体どうなっているのかということの見直しと展望を考えていくからというふうに考えている次第です。

「日本の伝統文化」の現状

「日本の伝統文化」という授業のポイントとしては、シラバスの記述では、「高度に完成された日本文化を生み出す土壌となった、生活に密着した広い文化的事象を伝統文化として捉え、これらを育んできた日本人の心を理解することに重点を置く」というのが、この科目の大きな特色になっています。

他の大学でも、伝統文化に関するカリキュラムがあり、あるいは「伝統文化」を冠した学科もあるのですが、多くの場合、例えば、能を見てみましょう、将棋を経験してみましょうという、そうしたすでにあるものを経験的に学んでいくというカリキュラムが、どちらかというと主体になっております。本学部における「日本の伝統文化」のカリキュラムにおいては、そうしたものは「高度に完成された日本文化」であると位置づけるとともに、むしろそういうものを生み出すことになった背景を注視したいというのが、大きな特色と考えているわけです。

この「日本の伝統文化」のカリキュラムを実際に教授していく上では、一年生の必修で「神道と文化」という授業がありま

すにしながら、その上に発展的に本学の学問の特色である「国学的研究」、すなわち、生活に密着した具体的な伝統文化の歴史的な考察というアプローチから日本人の心の本質に迫っていくというのが、この授業の大きな目的ということになります。今年度は、信仰、国土観、暦、年中行事、伝統芸能、生活文化、子供文化、教育文化、言語文化、身体文化、国旗・国歌、天皇と国民というテーマを選んで授業を行っています。

科目の教授内容の観点からの展望

以上を踏まえ、今後のこの科目について、二点ほど提案というか、自分自身が科目担当者の一人ですので、今後こうしていきたいという展望をお示ししておきたいと思います。

大きく分けて二つありますが、展望の一点目としては、この科目の授業内容という観点から、科目の中で一体何を教えていくのかという観点からの見直しを図っていきたい。

どういう視点から、見直しを図るのか。これは先ほどのシラバスの中にもありましたが、「国学的研究」という部分、果たしてこれが、現在きちんとできているのかどうか、という視点からの見直しをするべきではないかと考えております。

この「国学的研究」というのは、何もこの科目でぽつと出てきた視点ではありません。國學院大學が、ちょうどここ二十年弱ぐらいの間、ずっと行ってきた、平成十四年度ぐらいから行ってきた、言ってみれば、國學院大學のブランディング計画に則っているということができないのではないかと思います。

現在では「二十一世紀研究教育計画」と呼んでおりますが、

その最初の本学の動きとしては、文部科学省の平成十四年度「二十一世紀COEプログラム」に本学の「神道の日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が採択をされ、これによって、この神道と日本文化に関する研究と教育、さらにその発信というものを大学の主軸に置いたということになるわけです。

さらにこれを受け、ある意味継承する形で、平成十九年度から文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業（ORC事業）「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」が選定され、展開されることになった。このORC事業の方は、現在の「國學院大學博物館」につながります。

もともとは「伝統文化リサーチセンター資料館」という名称で発足しておりまして、このORC事業というのは、「伝統文化リサーチセンター」というものを立ち上げるにあたって、それを研究面できちんと充実させていこうというところから事業を展開したわけです。この事業においては、生活の中でつくられたものとその背景にある心の関係を明確化し、そこから抽出される伝統文化が育んだ知恵と実践の社会的意義を究明するということ、このプロジェクト自体の目的に設定しておりました。

平成十四年度以来、本学がずっと取り組んできた、こうした一連の研究・教育事業が、この「日本の伝統文化」という科目のベースになっているわけです。

そうした来歴を踏まえた上で、現状のカリキュラムの内容を見直してみますと、具体的な「モノ」という視点、さらには「地域」の視点というのを、より一層充実させていく必要があるのではないかと考えております。こうした視点は、従来もカリキュラムの中で当然あったのですが、「日本の伝統文化」という科

目は、本学部出発時にはもと二科目（Ⅰ・Ⅱ）だったものを、現在は一科目（オムニバス授業）に圧縮してしまっているという影響もあって、今お話しをしたような内容が、やや希薄になってしまっているという反省があります。実際の「モノ」から伝統文化を見るという視点、さらには「地域」から伝統文化を見るという視点は、教育者として、小学校、中学校、あるいは高等学校の教員を目指す学生たちに教えていく上でも、非常に重要な視点になります。また、「生活者」として、地域の伝統文化を実際に伝えていくという観点からも、これは必須の内容ではないかと考えているわけです。

そうしたところから、授業内容の反省点、改善点といったしましては、「國學院大學博物館」で「モノ」を実際に見せる、そうした内容を授業の中でいかに取りこんでいけるのが重要になると考えております。また、もう一点としては、特に歴史学の世界ではそれこそ三十年、二十年の間に、地域史研究がかなり進んできましたので。そうした地域史や民俗学などの成果を積極的に取り込んでいく、さらにその方法論を提示して、学生が自分の力で、日本の伝統文化というものを考えていける、そういう力を育成していきたいと思った次第です。

カリキュラム間連携の観点からの展望

展望の二点目、カリキュラム間連携、カリキュラム自体の観点からの展望として、まず関連諸科目間における授業内容の再確認ということが挙げられると思います。そもそも、この人間開発学部のカリキュラムを組むときには、この「日本の伝統文

化」と関連する科目群ということで、次のような科目が、共通教育プログラムや各学科に配置されているわけです。

共通教育プログラム 「神道と文化」、「國學院の学び」、「日本文化を知る」など

初等教育学科 基幹科目 「伝統文化授業論」、「伝統文化と生活論」など

健康体育学科 展開科目Ⅰ類（言語・古典）の各科目
展開科目Ⅳ類 「伝統文化と生活論」、「武道の国際比較」、「スポーツ史」、「武道と所作・礼法」など

子ども支援学科 展開科目Ⅰ類（子ども文化・環境）
「子ども文化論」など

その他 関連科目 「伝統文化と生活論」など
各教科の教育法、概説など

本来的には、これらはそれぞれの科目同士で内容がある程度意識し合いながら進めていくというのが当然だったわけですが、これまではなかなかそうした作業をすることができなかったという反省を踏まえた上で今回のシンポジウムのテーマが設定されたのだと思います。今後は、授業FDの一環として、ある程度担当者間での授業内容の確認みたいなことは、意識的に進めていく必要があるのだろうと考えております。授業内容の調整までやる必要があるのかというと、そこはなかなかたいへんなところもあると思いますが、少なくとも、お互いに一体どういうことをやっているのかということを見ておく必要はあるのではないかと思います。

次に、カリキュラムの体系的性を視覚化するということです。

今お話ししたように、もともと人間開発学部のカリキュラムでは、「日本の伝統文化」と関連する科目が、各学科のカリキュラムに分散して配置されているわけですが、その関係性ということが、学生にきちんと明示的に説明されてきたわけではない。『履修要綱』やシラバスを見れば分かるだろうということで、何となく進めてきてしまった部分もあります。

これについては、カリキュラムツリーを作成し、授業のガイダンスやまとめのときにきちんと説明をして、カリキュラム全体の中における「日本の伝統文化」の位置づけを行い、あるいは今後の履修計画に結びつけられるように促すなどの努力をする必要があるのではないかと考えております。

それから、もう一つは履修モデルです。これも私が長く教務部委員をやってきた経験上、なかなか履修モデルを提示するというのは難しい部分もあることは分かっているのですが、履修モデルとして、この伝統文化教育というものを提示すると一体どうなるのか。ただ、この履修モデルに関しては、伝統文化に關してのみ提示しても仕方ありませんので、それ以外の部分、例えば理数教育についてどう考えるのか。あるいは今後、初等教育学科の方で幼稚園課程が返上ということになった場合は、それもある種のコースや履修モデルとして提示していくということになりますので、そうした履修モデルの整備の一環として、この伝統文化教育のモデルなんかも形づくっていかたいのではないかと考えております。

以上、この「日本の伝統文化」のカリキュラム、科目の内容、カリキュラム間での位置づけ等々、今後の展望ということでお話をさせていただきました。ありがとうございます。

〔シンポジウム討議記録〕

報告者

夏秋英房（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

杉田 洋（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）

太田直之（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

コメンテーター

神長美津子（國學院大學人間開発学部子ども支援学科教授）

司会

藤田大誠（國學院大學人間開発学部健康体育学科教授）

藤田 まず、子ども支援学科で学部コア科目「教職論」を担当されている神長美津子先生よりコメントをいただきます。

人間開発学部におけるカリキュラムの基礎・土台・柱



神長 三人の先生の御報告後のコメントですので、とても辛いと思っております。私も子ども支援学科で「教職論」を受け持っておりますので、その立場から、三人の先生のお話をどう受けとめたいかということ、それを受けとめながら、子ども支援学科における「教職論」はどうあったら良いのかを、お話ししていきたいと

思っています。

これだけの内容をどうまとめていくか、非常に今、負担を感じておりますが、役割を務めたいと思います。三つの視点からお話しいたします。

一つ目は、「教職論」と他の二つの学部コア科目である「人間開発基礎論」と「日本の伝統文化」との関係がどうあったら良いのかということ。さらに、これら学部コア科目とその他の科目はどういう位置づけにあるのかということ。ただ、今日の話は、主に二つの学部コア科目間との関連だと思っています。

「人間開発基礎論」の御報告を伺うと、教育学的な視点から、「人を育てるとは何か」という「問い」を立てられており、自身が学んできたことをもう一度問われていると思いました。これからの展望という中では、やはり「学習者を育てる教師」になっていくということが大事なのだなと思いました。

教師になるとは、「人を育てる人」になっていくということなのだと思います。「教職論」は、教師になるということはどういうことなのかということを学んでいく科目なのですが、もともと基礎と土台を広くしながら「教職論」を組み立てていかなければいけないのではないかと。狭い小さな基礎と土台だったら、小さな教師にしかならないが、基礎と土台をしっかり広くとすると、非常に視野の広い教師になっていく。このような基礎・土台と「教職論」とを関連づけて御報告を伺っていたのです。

また、「日本の伝統文化」の御報告を伺うと、やはり基礎と土台は日本の伝統文化の中で育てていくものです。どんなに社会が変わろうとも、二〇三〇年になって本当にAIが全てをやってくれようとも、日本の伝統文化の中で人を育てていくと

いうことを改めて考え直す基礎と土台が必要だと思うのです。

「日本の伝統文化」と「人間開発基礎論」の両方とも、基礎や土台の部分だと思うのです。家を造るときには、まず基礎や土台をしっかり造らなければなりません。鉄筋コンクリートだったら、もっと深く岩盤まで柱を打ち込まなければ駄目というぐらいの、今までこう思っていたということを、しっかり基礎から見直していこうよ、また基礎の上の土台から見直していこうよ、ということを示しているのだなと思いました。

一方、「教職論」というのは、そういう基礎や土台の上に、教員免許を持つのであれば、どう人を育てていくか、人を育てるためには何を学んでいったら良いのかという、教員の資質と人を育てるために必要な資質を学生たちが学修していく科目ですので、基礎と土台の上に立てる柱なのだと思います。その柱が方向を間違えると、家の造りが傾いてしまうわけですので、カリキュラム全体が傾いてしまう。やはりそこに垂直に立っていないかなければいけないのだと思うし、周りの柱との関係も、しっかり見据えていかなければいけない。

またそこは初等教育学科と健康体育学科の「教職論」を受け持たれている杉田洋先生と同じだなと思ったことは、学生たちが先入観として持っている教員に対するイメージを打ち壊してからつくるのが大事だということです。教員に対するイメージとか人を育てるイメージは、こうあるべき、という「べき論」のようなどころから始まりますが、学生たちが持っている固定観念を一回壊してからつくり直していかなければならない。

やはり、教員資格を持つということや、人を育てるということがどういう意味を持っているのかを理解していくことが必要

だと思うのです。そのためには、どういう資質が必要なのかということ、順番に教えながら、先ほどの基礎と土台の上に柱を組み立てていくことだと思うのです。方向性をしっかり示していくことだと思うのです。

夏秋英房先生の言葉の中にあつた「学習環境」とか、いわゆる「学習者」としてどうあるべきか、ということからすれば、大学の四年間は「学習者」としての自分はどうあるべきか、という「問い」で良いが、卒業して指導する側に回ったそのときに、指導する「学習者」に対してどうあるべきか、ということをも自ら考えていくことが必要になります。そういう資質を持つていなければいけないと「教職論」では学んでいくことが必要です。だから、色々な学習を自ら学ぶということから組み立てていくことの必要性、大事さを、「教職論」の中でしっかりと認識し、それを身につけた学生が、大学四年間の学びを次のステージである教育の場、さらには職場でどう生かしていくか、つなげていくのかということを念頭に置いておかねばならないと思います。

しっかりと基礎と土台と柱を持つという意味では、学部コア科目を三学科共通で学ぶことがとても大事だと思います。

子ども支援学科の「教職論」における現状と課題

神長 二つ目は、先に述べたように、学生に教えながら、学生たちが今持っている教師像を一回壊し、次にどうつくっていくのかということが大事だと思っているのですが、杉田先生が組み立てている「教職論」はすごく魅力的な「教職論」であるの

に對し、どちらかというと私は、知識をいっぱい植えこんでいるな、という反省をしました。もっと心もしつかり伝えていかなければいけないと思ったのです。

子ども支援学科では、保育士とは何か、保育職とは何か、教職も色々な法律があるが、これは公務員の場合で、私立の場合はどうなるかと、現実はどうだと、そういう知識を伝えながら、このような実情を踏まえて職業選択を考えなさいというような部分が非常に多いのです。そういうことを知識として伝えていかなければいけないのです。この場合、資質とは何かというのを軸にしながら、柱を上に向かって必要な知識も積み上げていくということが必要なのかな、と思いました。

杉田先生は、この機会に見直したいと言われましたが、幼児教育の場合も、教員の質として、いつの時代にも変わらないものがあるがこれから変わるもの、また、専門性というところからのものを、もう一度整理することが大事だと思いました。

カリキュラム全体の中で見直すことの必要性

神長 三つ目にお話ししたいことは、展望です。子供が持っている良さや可能性を開いていくときに自分を「開発」しなければいけないのだという話がありました。そのことは幼児教育の場合には、色々な科目のところで言っているから大丈夫、その理念は学生に伝わっている、と思っていました。ただ、大丈夫と言いながらも、色々な知識を整理していくときに何が大事なのか、という軸足を持っていないといけないと思いました。人が持っている良さや可能性を開いていくという視点から、今、

教職の何を学んでいるのか、ということ、学生も教える側も分かっているなければ駄目だと思いました。

その意味で、カリキュラム全体の中でもう一回見直してみようという太田直之先生の御提案は非常に興味深いと思いました。自分が受け持つ科目にしても、他の科目では何をどうしているのか、ということの情報を得ながら、授業を組み立て直すということが必要だと思いました。

以上が私の感想です。この後の議論、どうぞよろしくお願いします。

藤田 神長先生、ありがとうございました。基礎と土台と柱という比喻を用いられた興味深いコメントでした。今回のシンポジウムで取り上げたのは、三つの学部コア科目なのですが、現時点ではなかなか難しい事情もあります。例えば、私も太田先生とともに受け持ってきた「日本の伝統文化」という授業は、基礎と土台になる科目でありながら、二年後期開講です。開講時期からすれば、同じく基礎と土台になる「人間開発基礎論（人間力育成の人間学）」と柱となる「教職論」は一年前期開講です。で、現状では柱を立てた後の講義となっています。

柱となる「教職論」では、教職の実践に関する知識を単に伝達するのではなく、実践するに当たった根本的な「問い」を考えさせる必要があるというお話しもあつたと思います。但し、私の個人的な意見ですが、前提となる基礎的な知識が無ければ、「問い」を考えていくことさえなかなか難しいのではないでしょう。うか。すでに知っていること以上の知識を知ろうとせず、単に自分の実感、五感で感じているものだけで様々な問題が解決

できるのであれば、大学など行かなくとも、もうすぐに色んな世界で活躍されれば良いと思います。

また、これは生き方の問題につながるのですが、私は他人の意見に心底納得したことがあまり無いし、逆に自分の意見も他者に殆ど御理解いただいたことも無いので、如何に計算や記憶に優れていようと、これからAIの発する言葉が私と同じようになるとは思えません。そんなものが出てきたら別に生きていなくても良いとさえ思っているのですが、個々の生き方のニュアンスが完全に均質化され、解消されることは無いでしょう。

社会をどうしていききたいのか、何か不穏なことが起こってきたときにどうしたらいいのか。個人的な考えでは、「人間開発」という理念は、軸は持ちながら包容性もかなりあるというものにしていて欲しいと思います。私は、今日の御報告を聞いてそれは可能ではないかと思ったわけですが、その辺りを含め、報告者の先生方からレスポンスをいただければと思います。

学校とは何か、教師とは何か

夏秋 杉田先生と神長先生のお話を伺って思ったのは、やはり教員もそうだし、学生もそうなのですが。学校は「つくる」ものだという事です。教員像を一度潰して、また新しく再構築すると神長先生はおっしゃいましたが、学生も、つくっていくという気構えを四年間で身につけて欲しいと願います。

ですから、すでにあるもの、あるところに自分が当て嵌っていくということだけではない。もちろん教職を目指すのであれば、教員文化を身につけ、そして、その教員になるための色ん

な資質を身につけて欲しいのですが、それにプラスして、もう少し教師観や教育観、あるいは「人を育てる」とは何かという、自分なりのものを作り上げていく過程が必要だと思っています。それは、私自身の「問い」でもあるので、そういったものは学生と一致するかどうかは知りませんが、「問い」は共有できるのではないかと思っています。

さきほど杉田先生がお示しになった「Society5.0」の映像などにあったように、こういう社会になると、逆に学校の存立基盤というか、学校が存在する意味がない。

ある科学者が言っていました。コンピューターが教えられるのだったら、あるいはコンピューターがあつて子どもが自分で学べるのだったら、教師はいらないよね、と。そうなったら一体教師とは何をする存在で、学校とは何をする所なのか。

さきほど藤田先生からも、すでに知っていることを求めて大学に来ているのだったら、その「知」とは何なのかという「問い」もありました。そこら辺のすごく原理的な部分です。話しが大き過ぎますが、近代産業社会が終わって新しい社会的フェーズに移ってきた中で、一体学校とは何か、教師とは何をするものなのか、というところを少し教えていただければ、「教職論」の中で、どういう伝え方をしたらいいのかといったところをお話いただければと思います。

杉田 やはり、つまるところ、教育は人づくり、教育は国づくりなのだと思うのです。警察官や自衛官の何倍分を雇って、この国の未来を託しているわけで。その使命感なるものは、まず学生にしっかり伝える必要があると思います。「働き方改革」は、

教師の志望者を減らしていますし、臨時的採用教員も全く足りていません。つまり、給料を得るためだけの教師では意味がないわけです。現在の「コロナ禍」においても同じ状況が起きたし、東日本大震災のときも同様でしたが、学校とは何なのかが「問い」だと思います。

ある識者に言わせれば、学校にわざわざ子供を集める必要があるのか、優秀な教員がネット配信すればそれで良いのではないかと、という人はいくらでもいるわけです。そうしたら施設は要らない。いじめも起こらないわけです、集まらないから。

なぜ学校というのは、人間が人間の集まりの中で人間にしているのか。なぜできる子もできない子も同じ教室に閉じこめ、効率性のある習熟度別にしないのか。なぜ日本の学級は、少人数学級にしないで少人数指導にしたのか。ある一定の社会をつくらなければ、社会性は身につかない。そうすると、AIができなくて人間にしかできないことは一体何なのかという「教職論」にしなければいけないのではないかと思います。

それから、私はやはり、國學院の学生を見ると、特徴は間違いなく出ているように思うのです。すごく平和的だし、民主的だし、優しいし。特に弱者に対する配慮はものすごくあるし。それはきっと、それぞれ先生方がおやりになっている、その背景にある考え方のようなものが広く伝わっているのではないかと思うのです。教育の成果というのは、何より学生が社会に出た後の姿で評価するのが一番良いと思うので、そういうことなのではないかと思っています。

私の教員時代にも、とても良い先生がいっぱい入ってきたのです。でも大抵は、二、三ヶ月すると、顔が曇って行って、辛

そうになっていくわけです。だって、初任者でそんなにうまくいきっこないですから。そういうときに私は訊くのです。「何で教員になったかったの？」と。そうすると、ほぼ百パーセントが、自分が巡り会った教員を挙げ、「学校行つてつらかったときに、とても良い学級作ってくれて、私に目を掛けてくれて、だから私は通えた」と、こう言うのですが、「あなたは、そんな教員になれているの？」と訊くと、ほろほろ泣くわけです。

学生時代に持っていた素のピュアなところは、教員として学校に入ると、みんなそれが壊されていく。そんなイメージが強い。なぜかというと、自分の周りの教員が、「ちゃんとあなた、叱っているの？」とか、「ちゃんと、厳しくやれているの？」と散々言うので、毎日子供たちの粗を見つけて、叱って、という教員に成り下がるわけです。つまり、子供たちが許せないのです。できないことや何かを許せないということ。まさに、「寛容性と謙虚さ」の問題なのですが。

それから、もう一度考えなければいけないのは、日本の教育が、その国民性が全て良いのかどうか、ということだと私は思っています。集団性の強さは、同調圧力や「村八分」の考え方にかなり起因しています。つまり、日本の学級からは、アインシュタインもエジソンも生まれないと言われている理由は、きつちりそこに当て嵌めて型を作ることが良い教員だという思いが、どこかにあるからではないか。こういうことから壊していく必要があるのではないかと思っています。

つまり、私としては、こんな社会人、こんな教員になって、人も豊かにし、人も幸せにし、自分も幸せになれるような、そんな生き方をしてもらいたいなという思いで、授業をやっている

るつもりです。答えになりませんが、以上です。

必修科目としての「教職論」と「日本の伝統文化」の考え方

藤田 太田先生にもお訊きしようと思います。私も太田先生とともにオムニバス授業の形式で「日本の伝統文化」を担当しているのですが、その難しさを実感しています。

「人間開発基礎論」ならば、「人間学」や「人間教育学」という観点から事例も出しつつ理論的に講じられ、「教職論」に関しては、実践現場から還元された理論や心構えを柱として立てていくという、どちらかと言えば水平的な空間軸の面がかなり強いと思います。一方、「日本の伝統文化」というのは時間軸の面がどうしても強くなる。しかし、今まであったことをそのまま理解するだけでは殆ど意味がなく、単に昔のものでしょ、ということではなく、その在り方を深く考えていくと、実は自分の身近な生活の中にもあるし、現に突きつけられている問題もあるということを伝えなければならぬと思うのです。

また、教育的な部分も色濃い「人間開発基礎論」や「教職論」でも難しいと思うのは、「指導者」養成を謳っているとはいえ、現実としては必ずしも教職志望者ばかりではない健康体育学科の学生に対してどう伝えていけば良いか、ということだと思います。「日本の伝統文化」の授業は、その辺も考えながら工夫しているつもりなのですが、この点について、太田先生の方から、健康体育学科の学生のことも含めた展望をもうちょっと付け加えていただけると有り難いと思います。

太田 今日の話は、どちらかというと、特に『学習指導要領』なんかの話も含め、この科目の位置づけということをお話しさせていただきました。一方で、日本の伝統文化というものを、「生活者」としてどう考えていくのかということ、また、何よりも、この國學院大學の卒業生として、社会に出て行って、社会の一員としてどう活躍をしていけるのか、ということを考えたいときに、これまで國學院というのは、この伝統文化研究・教育というものに力を注いできたわけで、やはり、社会としても、國學院というのはそういう大学だと思われているわけです。ですから、そうした視点から、これは「神道と文化」の授業でも同じことを学生には説明するのですが、國學院の卒業生として、社会の一員として少しでも貢献していけるというベースの力を育てていくべく取り組んでいるところです。

ここで「教職論」御担当の先生方に質問したいと思います。私は、この学部の上り上げのときからカリキュラム構築のところに携わらせていただいたのですが、特にこの「教職論」という科目は、人間開発学部の学部コア科目として、「教育者」だけではなく「指導者」という視点をも含めた、本学部にとつて普遍的な内容を持っていると思うのですが、一方で、先ほど神長先生からもお話しをいただいたように、「教職論」というのは、やはり教職課程の中の科目として、知識として教えないといけないことも当然多々あります。教職課程の科目としても必修なので、そうした性格がかなり強いと思うのです。

今、初等教育学科はそうでもないのですが、健康体育学科や子ども支援学科の場合、必ずしも教員免許を取ることを第一の目的としない学生が増えて来ている状況にあつて、「教職論」

を必修の学部コア科目に据えておいたままで良いでしょうか。今回のシンポジウムのテーマが「教育課程の再構築」ということでもありますので、改めて担当している先生方のお考えをお聞かせいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

藤田 それでは、神長先生、杉田先生の順番で簡潔にお話しただけだと思います。よろしくお願いいたします。

神長 御質問ありがとうございます。「教職論」という科目は、普通の幼稚園教諭の教職課程における科目名だと、「教職論（幼稚園）」となっているのですが、本学部では、立ち上げのときの議論もあってか、「幼稚園」という文言は入っていないのです。最初、この科目名を見たときに、幼稚園教諭の教職課程と保育士養成課程の両方を持っているのに、ここは「教職論」という名称でいくのだなという解釈をしています。ですから、通常の保育者養成だと「保育者論」となっていることを踏まえ、「なぜ教職論か」というところから講義しているので、今のところは、どうしてもここは「幼稚園教諭と保育士は異なる。それが現実だよ」ということで、「教職論」の中身に入っていきます。

子ども支援学科の場合には、免許は取りたいが教職や保育士には就かないという学生と、初めから就かないという学生は、本当にごく少数です。また、一年生のうちからこのように主張する学生は、非常に少ない。できるだけ「教職論」とは何か、一般には教職とはこう捉えられているが、これから目指すべき教職像とは何か、という形で、どちらの軸にいても、「教職論」に興味を持てるような入り口にしています。これが学部コア科

目であるということ意識しながら組み立てていくということ、は、大事なと思っています。

杉田 この大学に来て一、二年は、初等教育学科を教えるのは良いが、健康体育学科は、ちょっと嫌だなと思っていました。学生の方も、何でこの授業を受けなければいけないの？という顔をして来ていますから。受講する意義が見出せないという学生も少なからずいるとは思います。そういう中で、正直最初は学部コア科目である意義を見出せなかったことも確かです。

一方で、「僕は、教員の免許取るつもりもないし、そういう就職をするつもりもないが、人の生き方として、この授業を学んで良かった」とリアクションで言ってくれる学生もいるのです。そういうことを考えると、まるっきり無駄では無いかな、という思いがあります。実は、もともと教員を目指していなかったが、教員を目指そうと思うようになったという学生が、ほんの一部でも出て来たということもあります。ですから、そういう役割はあるのかなとは思っています。

こちらの方が勉強させられる。当初は、初等教育学科と健康体育学科は同じ授業で良いと思っていましたが、そうはいかない。学生のリアクションによって、こちらが学ばせられているという感じはあるのではないかと思います。

今、一生懸命やっている以上、完全に無駄ですという感じでは無いと思いますが、必修の学部コア科目でやることの意味は強く推せないという部分もあるかもしれません。以上です。

藤田 ありがとうございます。本当に率直に言っていたいただい

たというふうに思います。

これは「日本の伝統文化」を担当している太田先生と私も同様に抱えている問題です。実際、恐らく「教職論」よりも受ける意味が見出せない学生がたくさんいるように感じることもあります。一方で、その割には、結構まじめに受けているなとも思います。なかなか難しいところかなと思います。

これは、文学部だとか、神道文化学部だと、もうまるっきり違います。私は神道文化学部の専門科目も兼任していますが、全然反応が違います。それは当然なのですが、ただ、そうであっても、私は「日本の伝統文化」という授業を人間開発学部でやるべきだと思っています。やはり必修の学部コア科目として全員に学んでもらって、日本のことを総合的に幅広く学ぶ、知る。國學院大學に冠せられている「国学」というのは、文学や歴史だけで済むものではない総合的な幅広いものであり、まさに小学校教員のような立場、幅広く何でも知っているが自分の専門も持っているという先生の素養を培うのに最適な学問です。あるいは一般の社会人であっても、自分の得意分野はあるが、日本のことはある程度学んだことがあるし、自分でも調べられます、という人間になって欲しいと思っています。

報告者やコメンテーター以外からも御意見をいただければと思います。田沼茂紀先生（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）から手が挙がっておりますので、お願いします。

「人間開発学」の根本部分をどう考えるのか

田沼 私は、今日のお話を伺って、率直に申し上げます。詳しく

いことは、時間が無いのでやめますが、正直なことを申し上げますと、「這い回る人間開発学」という印象を持ちました。

それはなぜかと申しますと、ボルノウ教育学から始まったので、何となく私の思うようなところと重なってきたわけなのですが、どちらかというと、こそばゆい感じがしたのです。

高等教育、大学教育における「人間力の育成」というのは、これは学部がどこで何であろうが関係ないわけです。これは、何人も人間開発学部が特筆してやらなくても良いことなのです。これをあえて前面に持つてくるということは、どういうことなのか。ましてや、教育学、あるいは教員養成ということでは括って良いのかどうか、私はたいへん迷いました。

これは、皆さん、今まで色んな議論があって、お感じになっていることだと思うのですが、人間開発学部には下がついている三学科があるわけです。その三学科の立ち位置を考えていきますと、神長先生は、基礎・土台・柱とおっしゃいました。その柱を立てる前の基礎と土台をどこに置くのか。やはり、これがとても大事ではないかと思うのです。

ちょうど今、本学は第四次の二十一世紀研究教育計画というものをご推進しています。そこで一番重視しているのは、「國學院ブランディング」ということです。それを我々の学部段階に下ろしてきたときに、「人間開発学」をどう捉えていくのか。

私は今日、一番根本の部分を思い起こされました。自分たちの立ち位置を明確にしていかなないと、その中で「人間開発学」という、他の学部とは異なる、他の研究分野とは異なるものを構築できないのではないか。「人間開発学」を提示するということは、そういうことだと私は思うのですが、皆さん、どうお考

えでしょうか。以上です。ありがとうございました。

大きく語ると抜け落ちてしまうもの

藤田 次に柴田保之先生（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授）、お願いします。

柴田 僕は、「人間開発学」とは、強烈なスパイスみたいな部分が大きいと思っています。もう「教育学」という学はあるのですが、「人間開発学」にしかないスパイスみたいなものがあると思っています。

今日の話で、「人間開発学」の可能性や多様性の問題を考える際、大きく語ると絶対零れていくものがあるな、と思ったのは、AIの時代が変わるものはあるかもしれないが、AIの時代に人間開発学部が絶対見落としてはいけないものは、AIの時代に特有の子供の悲しみや幸せなわけです。AIの時代がどうなろうと、それは良いのです。そうでなくて、その時代を生きている子供たちはどうしているのか、という話です。

それがまだ学問として言葉にはなっていないと思います。だから、大きく語ると、子供たちの苦しみとか、生き辛さみたいなものが、学問の言葉にはなかなかならないと思うのです。

しかし、「人間開発」を名乗るところに特徴がある人間開発学部では、そういう多様な子供たちがいるということに対し、それに応え得る人材をどうつくるのか、ということを学部創設時の学部長であった新富康史先生はたくさん言っていました。

健康体育学科に関しても、うまくスポーツができない人たち

をどうするとか、色んな言葉が語られています。

そういうことが、大きく語ると出て来なくなるので、ちょっと心配になったのです。本来先生方もそういうことを大事にしていながら、大きく「人間開発」を語ると、それが抜け落ちてしまい、「人間開発」特有のものも、また見えなくなるのではないかと思ったので、それを言わせていただきました。

学部コア科目の存在こそがオリジナリティー

藤田 続いて伊藤英之先生（國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授）、お願いします。

伊藤 太田先生から「教職論」が学部コア科目で良いのかどうか、という問いかけがあり、「日本の伝統文化」にも同じ問題があるという話も出ました。僕が現在教務委員をやっている中で思うのが、健康体育学科の観点から考えてみても、数あるスポーツ科学系、体育系の大学、学部、学科の中で、「人間開発基礎論」や「教職論」、「日本の伝統文化」のような科目がコアや基盤としてあることが、むしろ國學院大學や人間開発学部健康体育学科のブランディングであり、オリジナリティーとなっているのではないかと思っています。

ですから、杉田先生や藤田先生の話で、あまり興味を持たずに受講している学生がたくさんいるところからは、最初の学部ガイダンスの段階で、こういうところから人間開発学部の勉強が始まり、健康体育学科のカリキュラムに位置づけられた基幹科目や展開科目に入っていくという説明が、やはり不足して

いるのではないかと反省させられました。できれば、教職に就きたいとか、就きたくないとか、そういうことではなくて、人間開発学部で勉強するということはこういうことなのだ、という基盤として、その三つの科目は、ぜひ、全学部生に前向きに受けてもらいたいと思います。僕は、基本的には、学部コア科目にある意義を大きく感じております。

学部全体で根本的課題を継続的に議論することの必要性

藤田 最後に、どうしても発言されたいという方、いらっしやいますか。それでは夏秋先生、お願いいたします。

夏秋 田沼先生、御指摘ありがとうございます。今日の資料を用意しながら、そういった質問があるだろうということは、考えておりました。御指摘いただいた通り、そこが大事なのです。また、今、柴田先生からの御意見にあったように、きれいに言えば、まさに現在の子供たちの姿にどう寄り添うか、そしてどう共に生きていくか、共に学んでいくか、という臨床性。ただ、実際にはもっと格闘していくことになるのだと思います。そこに焦点を当てて、そういった学生を育てることを考えていくということを柱や軸にする。

ここで皆さまと一緒に考えるべき一つの「問い」が、このように立てられるのであれば、それは今日、私どもが報告したことは良かったと思います。ありがとうございます。以上です。

藤田 ありがとうございます。今回は、なかなか結論づけると

いう性格のシンポジウムではありませんし、多分、先生方は個々に色んな思いや御意見をお持ちだと思います。実は、こういった機会はこれまで、あるようでそんなには無かったと思います。そういう意味では、やって良かったのではと思っています。

今回のシンポジウムのみならず、昨年度の國學院大學人間開発学会第十一回大会シンポジウム「人間開発」の再検討―その原点と将来を見据えて―も同様だったのですが、このような根本的なところを問いかけるといこと自体、あるいは、それぞれの先生方が行っている授業内容を知るといことも、これまでではなかなか無かったのではないかと、思います。

できれば、やはり今後も何らかの形で継続的にこういった機会を設けつつ、今まで話し合ってきたことを、なるべく次の段階に進めていければと思います。

私の考えは、聊かラディカル過ぎて、このような場ではあまり言葉にも出せませんが、そもそも「人間」とは何なのか。私自身は、「人間」自体があまり好きではないので、そういう人間が、なぜここで教えているのかという、矛盾する自分自身への根本的な問いかけが、もう毎日あります。しかし、それはそれとして、自分なりには現実に即して一所懸命考えているつもりですが、もちろん先生方もそれぞれのお立場で、深く考えていらっしやるというふうに思いますので、こういう場がもう少し増えれば良いのではないかと、個人的には思っています。なかなかまとまりませんが、このシンポジウムは、これで終了いたします。ありがとうございました。